巻頭言

ICID 活動に新たなマネージメント導入を期待する

日技クラウン株式会社　上田　一美

2002 年モントリオール ICID 会議での第 1 回 SDTA（Sustainable Development of Tidal Areas：感潮地域の持続的開発）ワークショップ（WS）で、『日本の干拓』と題したプレゼンを行なった。その縁で SDTA 委員会のメンバーとさせて頂いた。本来であれば、この幅広で奥の深い委員会の活動状況を報告するべきと考えるが、本会報第 17 号の佐藤洋平理事長の巻頭言『レーゾンデートルの再思三省』が琴線に触れたこともあり、折角の機会でもあるので、私なりの所感を思いつくまま述べさせて頂くこととした。もとより私は、農水省在職中からも ICID の活動に直接関与したこともなく、SDTA の委員になってからでも毎年の出席すらままならず、ただ SDTA の作業部会（WG）及び WS に出席するのみで ICID 全体の執行、運営に関する事項には関与すらした事がないので、ピントはずれの点があることはお許し願いたい。

本年 2007 年サクラメントでは WG と WS の間が長く、日程表を見ながら思いつきで委員会やセッションのプレゼンを覗き見聞して回った。今回はカリフォルニアの現場報告等も多く含まれており、個人的には非常に有意義であったが、一方、毎年同じような顔ぶれで、同じような形態で進められていく会議を外観しながら、この伝統ある組織がこの激変する現代の世界で、どの様に変身しどの様な役割を担っていくのか、あるいはこのまま従前のマネージメントを転換できなくて衰退していくのか、一人の灌漑排水関係技術者として強い危機感を抱いた。

インターネットの発達のお陰でグローバル化、フラット化が急激に進み、情報の発信、受信は信じられないほど高度でかつ容易であり、組織の諸活動もネット形態でヌエ的な有効なものが容易となっている。コンピューターで補えないヒューミントと言われる人脈も、現在ではマルチ機関に頼らなくとも、個別ごとにバイで可能な世界となっている。従来の仲良し倶楽部的な存在はほとんど意味を持たなくなってきている。従前の基礎の上に立った新たな活動マネージメントが早急に必要とされる由縁である。日本国内についても同様のことが言える。若い有志による改革案の検討が急務と考えられ、これを基に関係者全員の参画による議論が必要であろう。もとより、国内委員会や協会が永年に亘り果たしてきた役割や多大の実績については十分敬意を表している。角田豊、谷山重孝両氏による『ICID を取り巻く現状と今後の展開』（農業土木学会誌第 75 巻 5 号）や、太田信介会長、谷山重孝前会長や渡邉紹裕先生による本会報巻頭言（第 14，15，16 号）による説明や主張についても良く理解が出来る。ICID が私共にとって、幸か不幸か唯一の国際的な舞台であることもあらためて認識させられる。

これらの事を勘案すると、やはり今、新たなマネージメントの導入を模索する潮時であろうと思慮される。

さて、紙面の関係で一足飛びに一点だけ民間からみた提言をさせて貰う。

私は読んだことがないが、聞くところよれば ICID JOURNAL『Irrigation and Drainage』に論文が掲載されることは、研究者にとっては大きなポイントであるらしく、会議でのプレゼン等も重要な研究業績とみなされるらしい。又、官にとっては国際的に認知された政策展開の舞台でもあり、既に WWF での議論にも大きな影響をあたえており、その有効性が実証されている。今後もこのような役割は他機関との連携においてもますます重要になると考えられる。一方、これらとは逆に、民間の法人や技術者にとっては、特段何のインセンテイブも見当たらない。あえて言えば、国内の会議と同様の CPD のポイント位ではっきり言って趣味の域を出ない。多くの経験豊富な民間の法人や技術者が ICID に関心を持つことなく、さしたる技術的、財政的支援、貢献もせず、論文も発表しないのは、上記の理由によるのではなかろうか。

民間法人や技術者に、研究者に匹敵する実績カウントや社会的貢献度が認知されるようになれば、民の活動や貢献度も変わるはずである。ぜひルールの新設を検討願いたい。

以上、思いつきの所感を述べてきたが、この大転換期をうまく乗り切り、若い技術者（民間も含め）がこぞって多く参加する会議になることを切望する。今時の若い人は英語によるプレゼンにはあまり抵抗感は無いと聞いているが、それでも必要に応じて協会で英語プレゼンのお手伝いを組織的に対応するよう考えてみてはいかがだろうか。幸いにして教官級の先輩は多数おられる。又最後に、オランダの国内委員会が出版した『MAN-MADE LOWLANDS』のような大事業が、日本の協会でも実施されんことを祈念している。